再ビ我教室ニ於ケル耳性腦靜脈竇血栓ノ 統計的觀察ニ就テ

Dr. Shigeo Takahara, Dr. Sadakuni Oka u. Dr. Kinjiro Ohno: Casuistische
Untersuchung über die in den letzten 15 Jahren in unserer Klinik
beobachteten 61 Fälle von otogener Sinusthrombose.

岡山醫科大學耳鼻咽喉科教室 (主任 田中教授)

醫學博士	高	原	滋	夫
	タカ	ヘラ	シゲ	フ
醫學士	岡		貞	邦
	オカ		サダ	クニ
醫學士	大	野	勤	次郎
	オホ	ノ	キン	ラウ

凡テ耳性頭蓋内合併症ノ如キ生命上危險ヲ伴フ疾患ニ於テ、其療法ノ改善ヲ圖ラントスル目的ノ爲メニハ、絶ヘズ過去ノ治療方針ニヨリテ獲タル成績ヲ統計的ニ願ミ、之ヲ批判シ、以テ其後ノ治療ニ對スル一指針ヲシムル事ガ最も有意義ナル事ナリト信ズ。
斯カル意味ニ於テ竊ニ我教室ニ於テハ大正11年ヨリ昭和6年ニ至ル滿10箇年間に於ケル耳性

腦靜脈竇血栓32例ニ就テノ統計的觀察ヲ行ヒ、種々批判ヲ加ヘテ夫ヲ報告シ、以テ其後ノ治療ニ改善ニ資シタルガ、余等ハ茲ニ再ビ其後ノ5箇年間に耳性腦靜脈竇血栓ノ統計的觀察ヲ試ミ、之ヲ先年ノ統計ト比較對照シ、併セテ其間ニ於ケル療法推移ノ跡ヲモ回顧シ、以テ更ニ我今後ノ療法ニ對スル參考ニ供セントス。

第一章

症 例

昭和7年1月ヨリ昭和11年12月ニ至ル滿5箇年間に我教室ニテ治療セル耳性腦靜脈竇血栓例ハ總數29例ニシテ、今之等症例ノ個々ニ就キテ其病歴ヲ仔細ニ回顧觀察スルニ興味深キモ

ノ勸カラザレ共、之等ノ詳細ナル記載ハ却テ煩雜ヲ來タス懼アレバ、茲ニハ之ヲ簡單ニ第1表ニ一括報告シ、之ヲ基礎トシ以下注意ス可キ事項ニ就キテノミ考察ヲ加ヘントス。

第二章

統計的觀察

1. 他ノ耳性頭蓋内合併症ト

比較シテノ頻度

滿5箇年間に我教室ニ於テ經驗シタル耳性頭蓋内合併症ハ總數56例ニシテ、同期間ノ乳嚢突起炎手術總數612耳ニ對シ9.1%ニ當レリ。

之ヲ細別セバ第2表ノ如ク、

竇血栓……………	21例
竇血栓+軟腦膜炎……………	6例
竇血栓+軟腦膜炎+腦膿瘍……………	2例
軟腦膜炎……………	21例
軟腦膜炎+腦膿瘍……………	6例

例 症 表 第 1

症 例 番 號	姓 名	年 齡	初 診 年 月 日	原 病 繼	起 炎 箇	血 栓 ノ 性 質	蔓 延 狀 態	合 併 症	症				候 手 術 手 術 式	手 術			死 因
									熱 毒	惡 寒	頰 紅	グリン グレン 症 狀	血 液 中 細 菌 (ヨリ は)	頸 動 脈 切 開 術	V-J 結 紮	血 栓 切 除 術	
1	櫻某	♂ 17	昭和7年1月10日	右慢中 耳化膿(ヒコソレ) 症	線 菌	閉塞性 (壓迫性)	横 靜脈球	-	弛 張	+	+	+	葡萄球菌	R	+	+	治
2	武某	♀ 7	昭和7年2月16日	左 中耳化膿症	※	閉塞性 (壓迫性)	横 靜脈球	-	無	-	-	-	※	S	-	+	治
3	西某	♂ 49	昭和7年4月12日	右 中耳化膿症	※	閉塞性 (壓迫性)	横 靜脈球	-	無	-	+	-	-	S	-	+	治
4	西澤某	♂ 26	昭和7年5月10日	右慢中 耳化膿(ヒコソレ) 症	※	壁在性	横 靜脈球	化膿性 膿瘍	弛 張	+	+	-	※	R	-	+	膿膜炎 症 惡 化
5	松岡某	♂ 45	昭和7年5月15日	左慢中 耳化膿(ヒコソレ) 症	連 球	閉塞性	横 靜脈球	化膿性 膿瘍	弛 張	+	+	-	連球菌	R	+	+	膿膜炎 症 惡 化
6	山田某	♂ 28	昭和7年5月23日	右 中耳化膿症	連 球	閉塞性	横 靜脈球	化膿性 膿瘍	弛 張	+	+	-	-	R	+	+	治
7	峰谷某	♂ 71	昭和7年6月29日	右 中耳化膿症	連 球	閉塞性 心臓端 器質化	横 靜脈球	化膿性 膿瘍	微	-	+	-	※	S	-	+	膿膜炎 症 惡 化
8	高馬某	♀ 60	昭和7年7月6日	右 中耳化膿症	※	閉塞性	横 靜脈球	-	弛 張	+	+	+	※	S	+	+	治
9	西山某	♀ 7	昭和7年9月3日	左 中耳化膿症	※	閉塞性 器質化	横 靜脈球	-	無	-	-	-	※	R	-	+	治
10	小橋某	♀ 57	昭和7年12月29日	左 中耳化膿症	「ム ー ス」	閉塞性 器質化	横 靜脈球	-	無	-	+	-	-	S	-	-	治
11	小林某	♂ 13	昭和8年1月13日	左慢中 耳化膿(ヒコソレ) 症	※	閉塞性 (壓迫性)	横 靜脈球	-	弛 張	+	+	-	※	R	-	+	治
12	小川某	♀ 57	昭和8年1月24日	左 中耳化膿症	連 球	閉塞性	横 靜脈球	化膿性 膿瘍	弛 張	+	+	-	連球菌	S	+	+	膿膜炎 症 惡 化
13	若林某	♀ 48	昭和8年3月21日	右 中耳化膿症	連 球	閉塞性	横 靜脈球	化膿性 膿瘍	微	-	+	-	※	S	+	+	膿膜炎 症 惡 化

14	堀本某	♂ 31	昭和8年 5月13日	左 中耳化膿症	「ム ー ズ」	閉塞性	横竇	-	弛 張	+	+	+	+	+	※	140mm	S	竇周囲膿瘍 → 脳膿瘍	+	+	+	治
15	内海某	♂ 20	昭和8年 10月31日	左 中耳化膿症	「ム ー ズ」	閉塞性 (器質性)	横竇	-	微 張	-	-	-	-	-	※	70mm	R	骨壁破損竇 周囲膿瘍	-	-	-	治
16	尾崎某	♀ 6	昭和9年 6月6日	左 中耳化膿症	葡萄 球菌	閉塞性	横竇	-	弛 張	+	+	+	+	+	-	130mm	S	骨壁及竇 ニ瘻孔中ヨ リ膿汁湧出	+	+	+	治
17	松川某	♂ 21	昭和9年 11月19日	右 中耳化膿症	連球 菌	閉塞性 (壓迫性) 器質性	横竇	-	弛 張	-	-	+	+	+	-	150mm	S	骨壁消失竇 周囲膿瘍	+	+	+	治
18	内田某	♂ 16	昭和9年 12月26日	右 中耳化膿症	桿菌	閉塞性	横竇	-	稽 留	+	+	+	+	+	※	100mm	R	骨壁ニ瘻孔全 體「カリエス」 狀竇周囲膿瘍	-	+	+	治
19	下江某	♀ 10	昭和10年 2月15日	左 中耳化膿症	連球菌 變形菌	閉塞性	横 竇 靜脈球 頸靜脈	化膿性 膿膜炎	弛 張	+	+	+	+	+	-	60mm	R	骨壁ニ瘻孔全 體「カリエス」 狀竇周囲膿瘍	+	+	+	治
20	今田某	♂ 51	昭和10年 3月29日	右 中耳化膿症	※	閉塞性 器質性	横竇	-	微 張	-	-	+	+	+	※	※	R	竇周囲膿瘍	-	-	-	治
21	大村某	♂ 62	昭和10年 9月19日	右 中耳化膿症	連球 菌	閉塞性	横竇	-	弛 張	+	+	+	+	+	-	60mm	S	骨壁「カリ エス」狀	+	+	+	死 敗血性 全身傳 染
22	西岡某	♂ 20	昭和10年 10月23日	左 中耳化膿症	連球菌 雙球菌	閉塞性	横竇	-	弛 張	+	+	+	+	+	-	140mm	S	骨壁「カリ エス」狀骨及竇 壁ニ瘻孔	+	+	+	治
23	福井某	♀ 14	昭和11年 1月27日	中 耳化膿症	連球菌	壁在性	横竇	-	弛 張	+	+	+	+	+	-	150mm	S	竇周囲膿瘍	+	-	-	治
24	廣尾某	♂ 32	昭和11年 1月27日	右 中耳化膿症	連球菌 雙球菌	閉塞性	横竇	-	弛 張	+	+	+	+	+	※	180mm	S	骨壁及竇 壁ニ瘻孔 損傷	+	+	+	治
25	大草某	♀ 40	昭和11年 2月3日	右(前)急 中耳化膿症	連球 菌	閉塞性	横竇 (右)	化膿性膿 膜炎、小 膿瘍	弛 張	+	+	+	+	+	※	90mm	R	骨壁著變無	-	+	+	死 膿瘍炎及 膿瘍癰 腫化
26	明石某	♀ 53	昭和11年 2月10日	左 中耳化膿症	及球菌 連球菌 葡萄球菌	閉塞性	上岩條 竇横竇 靜脈球	-	弛 張	+	+	+	+	+	葡萄球菌	150mm	S	骨壁著變 ヲ認メズ	+	+	+	治
27	黒原某	♀ 23	昭和11年 4月30日	左 中耳化膿症	連球 菌	閉塞性 器質性	横竇	-	微 張	-	-	+	+	+	※	※	S	竇周囲膿瘍	-	-	-	治
28	藤原某	♂ 17	昭和11年 5月22日	左 中耳化膿症	連球 菌	閉塞性	横竇	-	弛 張	+	+	+	+	+	※	145mm	S	骨壁著變無	+	+	+	治
29	竹中某	♂ 12	昭和11年 8月27日	左 中耳化膿症	※	閉塞性	横竇	-	弛 張	+	+	+	+	+	※	0	S	骨及竇壁ニ瘻 孔(第一次手 術ニ際シ損傷 ?)之ヨリ膿 汁湧出	+	+	+	治

※.....「カルテ」に記載無キモノ S.....シユワルチエ氏手術 R.....根治手術

自大正 11 年 至昭和 11 年 満 15 年間ノ頭蓋内合併症

合併症名	自大正11年 至昭和6年 10年間	自昭和7年 至昭和11年 5年間	總計 15 年 間
竇 血 栓	25	21	46
症 例 別	症 例 別	症 例 別	症 例 別
竇血栓、腦膜炎	5	6	11
竇血栓、腦膿瘍	2	0	2
竇血栓、腦膜炎 及ビ腦膿瘍	0	2	2
腦 膜 炎	26	21	47
腦 膿 瘍	2	0	2
腦膜炎、腦膿瘍	3	6	9
症 例 總 數	63	56	119

而シテ他ノ合併症ヲ有セザル純粹ノモノ、ミヲ舉ゲレバ竇血栓 21 例、軟腦膜炎 21 例ナルモ、同一人ニシテ竇血栓、軟腦膜炎又ハ腦膿瘍ノ孰レカニツ以上ヲ併セ有スルモノアレバ、之ヲ病症別ニ分チ觀察スルニ、竇血栓 29 例、軟腦膜炎 35 例、腦膿瘍 8 例トナルヲ見ル。然レドモ竇血栓＋軟腦膜炎ノ 6 例中ニハ、竇血栓ヨリ軟腦膜炎ヲ惹起セシモノト例アレバ、之ヲ軟腦膜炎ノ症例數ヨリ除去スルニ、軟腦膜炎ハ 31 例トナリ、即チ軟腦膜炎ノ竇血栓ヨリモ其數多キヲ知リタリ。茲ニ我教室ヨリ發表セル滿 10 箇年間ノ統計ニ於テ之ヲ病症別ニ分類セシニ、竇血栓 32 例、軟腦膜炎 29 例、腦膿瘍 7 例ニシテ竇血栓ガ最多數ナリシモ、今回ノ成績ニ於テハ却テ軟腦膜炎ガ最多數ヲ示シタリ。

耳性頭蓋内合併症中、硬腦膜外膿瘍ヲ除キ（硬腦膜外膿瘍ハ耳性頭蓋内合併症中最多キモノナルモ、夫レ自身ハ良性ノモノナレバ之ヲ統計ヨリ除外ス）、他ノ軟腦膜炎、竇血栓及ビ腦膿瘍ノ頻度ニ關シテハ、之ヲ内外ノ信頼ス可キ主ナル文献ニ徵スルニ、竇血栓ノ最多數ナルヲ報

告セルモノ（第 3 表）、及ビ軟腦膜炎ヲ以テ最多數ナリスルモノ（第 4 表）ト相半スルノ狀態ナリ。

第 3 表

病 名 報告者	竇 血 栓	軟腦膜炎	腦 膿 瘍
リュック	81	62	28
ハイマン	65	28	12
ブリュール	38	34	18
(今井) (和田臨牀)	25	22	9
田 中	32	29	7

第 4 表

病 名 報告者	竇 血 栓	軟腦膜炎	腦 膿 瘍
ミュンヘン 敦 室	97	145	56
ミギンド	106	141	42
(佐藤) (中村臨牀)	19	62	6
(倉田、藤田) (山川臨牀)	30	35	5
(宮崎) (星野臨牀)	29	38	6

斯カル統計の數字ハ出來得レバ同一臨牀ニ於テ長期間ニ亘レルモノ程、信頼スルニ足ル數字ト言ヒ得可ク、依ツテ參考ノ爲メ之ヲ我教室ノ滿

15年間ニ亙リ通覽スルニ、第2表ノ如ク竇血栓61例、軟腦膜炎60例、腦膿瘍15例トナリ、竇血栓ガ1例ノミ軟腦膜炎ヨリ多キモ、之ヨリシテ余等ハ竇血栓ガ必ズシモ腦膜炎ヨリ多數ナリト考ヘルモノニ非ズシテ、余等ハ其孰レガ多數ヲ占ムルヤニ關シテハ、更ニ今後ノ詳細ナル統計的觀察ニ俟タントス。

2. 乳嘴突起炎ニ對スル竇血栓ノ頻度

我教室ニ於テ最近5年間ニ乳嘴突起炎トシテ手術セル總數ハ612耳ニシテ、29例ノ竇血栓ハ之ニ對シ4.7%トナリ、此比率ハ前回ノ10年間ニ於ケル際ノ3.3%ヨリ大ナリ。

3. 性並ニ年齢

全症例29例中男性17例、女性12例ニシテ、此比率ハケルネル、ハイマン及ビ前回ノ我教室ニ於ケル統計ニ於テ男性ハ女性ヨリモ約2倍多數ヲ示セルニ及バザルモ、尙ホ且ツ多少男性ニ多キヲ示セリ。

次ニ年齢ニ關シテハ1—10歳…3例、11—20歳…7例、21—30歳…6例、31—40歳…2例、41—50歳…4例、51—60歳…4例、61—70歳…2例、71—80歳…1例ニシテ、即チ10歳代ノ7例最モ多ク、20歳代ノ6例之ニ次グ。而シテ從來諸家ノ稱フル所モ略々之ト一致シ、ケルネル、ユング、ベーラウ、今井等孰レモ10歳代ニ最モ多キヲ示ス。前回ノ我教室ニ於ケル統計及ビ倉田ノ統計ハ之ト多少異ナリ、20歳代ニ最モ多ク、10歳代ノモノ之ニ次グモ、孰レニセヨ本症ハ青年期ニ最モ多ク之ヲ見ルモノナルコトハ諸家ノ統計ノ略々一致スル所ナリ。

4. 中耳化膿症ト血栓成立トノ關係

イ. 中耳化膿症ノ性質トノ關係

耳性竇血栓ノ成立ニ關シテハ、從來一般ニ慢

性症殊ニ中耳「ヒョレステアトーム」ニ續發スルモノ多シトサレタルモ（ミギンド、カールホーン）。其後諸家ノ報告ヲ見ルニ、ハイマン、今井、倉田及ビ前回ノ我教室ニ於ケル統計等悉ク却ツテ急性症ニ多キヲ示シ、余等ノ症例又之ヲ裏書キスルモノニシテ、即チ29例中急性症ニ由來スルモノ20例ニ對シ、慢性症ヨリノモノハ僅カ9例（内中耳「ヒョレステアトーム」ヨリノモノ4例）ニ過ギズ。之ヲ察スルニ、本症ニ對スル診斷法ノ進歩ト共ニ、從來ニアリテハ診斷不明トシテ荏苒時日ノ經過ニ委ネラレタル症例ノ、近年ニ於テハ早期ニ克ク之ヲ診斷處置シ得ルニ至リタルノ尠カラザルニ因ル所ナランカ。

ロ. 中耳化膿症ノ起炎菌

竇血栓形成ニ至レル中耳化膿症ノ起炎菌トシテ一般ニ最モ多ク檢出サルルモノハ連鎖狀球菌ニシテ、ハイマンガ自己ノ症例ノ他ニ文献ヨリ確實ナリト認メ得タル症例ヲ合セタル約400例ニ就キテノ調査成績ニヨレバ、起炎菌ノ種類及ビ其頻度ハ、

連鎖狀球菌	60%
葡萄狀球菌	17%
肺炎菌	7.5%
双球菌	6%
粘液性連鎖狀球菌	4%
大腸菌	2%
「プロテウス」菌	2%

ノ如ク、殘餘ハ之等ノ混合傳染又ハ少數ナル他ノ細菌ナリキ。

余等ノ症例中細菌檢査ヲ行ヘルモノハ21例ナルモ、内

連鎖狀球菌	11例
-------	-----

粘液性連鎖狀球菌……………3例
 葡萄狀球菌……………1例
 綠膿菌……………1例
 單ニ桿菌ト記セルモノ……………1例
 混合感染……………4例
 連鎖狀球菌＋双球菌……………2例
 連鎖狀球菌＋双球菌＋葡萄狀球菌……………1例
 連鎖狀球菌＋「プロテウス」菌……………1例

ニシテ、連鎖狀球菌ハ其過半数ヲ占ムルヲ知ル。尙ホチェーマンハ特ニ粘液性連鎖狀球菌ニ因ル乳嘴突起炎ガ竇血栓ヲ來タシ易シト稱ヘ、最近倉田モ竇血栓30例中13例(43%)ニ於テ原病竈タル乳嘴突起炎ノ本菌ニヨルモノナルヲ證明シテ特ニ本菌ニ就テ注意ヲ喚起セルモ、之ニ對シ中村教授ハ、粘液性連鎖狀球菌ハ竇周圍膿瘍ヲ續發スル事多キモ、血栓形成ヲ見ル事尠シト言ヘリ。余等ノ例ニ於テモ、本菌ヲ證明セシハ僅カ3例(細菌検査ヲ行ヒタル症例ノ14%)ニ過ギズ。

ハ、罹 患 側

之ニ關シテハ第5表ノ如クニシテ、最近5箇年間ノ統計ニ於テハ急性症及ビ慢性症共ニ右側

ヨリモ左側ニ多キヲ知ル。罹患側ニ關シテハ從來ケルネルハ自己ノ統計の成績並ニ右側S字狀竇及ビ頸靜脈球ノ左側ニ比シ深ク乳嘴蜂窠内ニ突隆シ、從ツテ蜂窠内ノ炎症ハ右側ニ於テハ左側ヨリモ容易ニ竇壁ニ波及ストノ解剖的根據ヨリシテ、本症ハ右側ニ多シトナシ、之ニ對シハイマンハ自己ノ統計ニ於テ右側ヨリモ寧ロ左側ノ多數ナルヨリ、之ニ直ニ賛成シ得ズトシ、ヘゲネルハ矢張氏ノ症例ニヨル統計ヨリ、ケルネルノ主張ハ單ニ急性中耳化膿症ノ場合ニ於テノミ正當ナリト主張セリ。而シテ、今井並ニ我教室前回ノ統計ニ於テハ全體トシテ右側ニ於テ遙カニ罹患率大ナリシモ、今回余等ノ統計ニ於テハ、急性症、慢性症孰レニ於テモ、左側ニ於テ僅カニ多數ナルヲ見、尙ホ我教室15年間ノ症例ヲ總計スルニ、第5表ノ如ク全體トシテ右側32例、左側29例ニシテ右側多ク、之ヲ急性症ニ見ルニ右側多ク、慢性症ニ於テハ左側多キヲ示シ、ヘゲネルノ主張ノ如ク、ケルネルノ持説ハ特ニ急性症ニ關シテノミハ正當ナランカト推ハシメタルモ、之ニ就キテモ更ニ統計ヲ重ネルノ必要アリ。

第 5 表

中耳炎ノ性質 統計期間 罹患側	急性中耳化膿症ニヨル竇血栓			慢性中耳化膿症ニヨル竇血栓			總 數	
	大11—昭6 10年間	昭7—昭11 5年間	大11—昭11 15年間	大11—昭6 10年間	昭7—昭11 5年間	大11—昭11 15年間	昭7—昭11 5年間	大11—昭11 15年間
右 側	16	9	25	3	4	7	13	32
左 側	6	11	17	7	5	12	16	29
計	22	20	42	10	9	19	26	61

5. 竇血栓ノ性状

イ. 竇周圍ニ於ケル變化

一般ニ耳性腦靜脈竇血栓ハ中耳殊ニ乳嘴蜂窠

中ニ於ケル炎症ニ續發スルモノナルガ故ニ、原病タル乳嘴突起炎手術ニ際シ、既ニ竇骨壁ニ變化ヲ生ジ、或ハ更ニ進ンデ竇周圍ニ膿瘍ノ形成

ヲ見ル事屢ニナリ。余等ノ症例ニ於テモ、

竇周圍膿瘍ヲ形成セルモノ……………16例

竇骨壁「カリエス」様トナリ。又ハ

瘻孔ヲ形成セルモノ……………7例

骨壁＝外見上著變ヲ認メザルモノ6例

ニシテ、即チ大多數ニ於テハ竇周圍ニ何等カノ變化ヲ認メ得タルモ、又著變無キモノ(20.6%)モ決シテ稀ナラザルヲ知り得タリ。

尙ホ前回ノ調査ニ際シテハ、中耳「ヒョレステアトーム」後ノ血栓例ニ於テ骨壁ノ健全ナルモノ皆無ナリト報ジアルモ、第5例(松岡)ノ如キハ慢性症殊ニ中耳「ヒョレステアトーム」ニ續發シ、然モ第1回検査ニ際シテハ横竇骨壁ニ著變ヲ認メザリシモノニシテ、此點前回ノ報告ト異ナル所アリテ多少興味ヲ感ズルト共ニ、本例ハ骨壁ニ變化ヲ認メザリシ爲メ、臨牀上血栓ノ疑ヒ濃厚ナリシモノニ拘ハラズ、尙ホ暫ク經過ヲ觀察サレ、後會厭ニ轉移性炎症ヲ生ズルニ及ビ再ビ詳細ニ検査セラレ、茲ニ初メテ血栓ヲ確認セラルハ、ニ至リタルモノニシテ、斯ク竇壁ノ正常ナル所見ヲ呈スルモノニアリテモ、臨牀症狀ニ於テ血栓ヲ疑ハシムルモノアレバ、血栓存在ノ疑ヲ決シテ忽ニスルコトナク、徹底的ニ之ガ追求ヲ試ム可キ必要ヲ痛感センメラレタリ。

ロ。血栓ノ性質

全症例29例中閉塞性血栓27例アリ。此内血栓ノ既ニ全ク器質化セルモノヲ7例ニ於テ發見セリ。次ニ壁在性血栓ニシテ之ヲ察知シ得タルハ僅カ2例ノミナリシガ、之レ全ク其診斷ノ困難ナル爲メニシテ、此點尙ホ將來ノ研究ニ俟ツ所多シ。

ハ。血栓蔓延狀態

横 竇……………21例

横竇、靜脈球……………2例

横竇、靜脈球、内頸靜脈……………3例

靜脈球、内頸靜脈……………1例

横竇、上矢狀竇、反對側横竇……………1例

上岩様竇、横竇、靜脈球……………1例

此内靜脈球ニ血栓ヲ證明セル7例中第12例(小川)ハ明カニ球部ニ原發セル症例ニシテ、其他第5例(松岡)、第19例(下江)、第26例(明石)ノ如キモ、恐ラク球部ニ原發セシモノト考ヘラルハモノナルモ、孰レモ横竇ニ蔓延スルニ及ビ初メテ確實ニ診斷シ得タル症例ナリ。之ヨリシテ吾人ハ之等症例ノ經過ニヨリ教ヘラルハ、如ク、乳嘴突起炎手術後尙ホ長ク發熱アリ、他ニ適確ナル熱源無ク、然モモクエッケンステット氏試驗陽性ニ加フルニ側頸部淋巴腺ノ腫脹、壓痛ノ存スルガ如キモノニ於テハ、假令横竇ニ於テハ血栓ヲ認メ得ズトモ常ニ内頸靜脈、靜脈球部ノ血栓ニ對スル充分ナル注意ヲ怠ラザル様努ム可キモノナラン。

ニ。成立様式

竇血栓形成ニ際シ最モ重要ナル原因的要素トナルモノハ中耳ヨリ主トシテ直接ニ、稀ニ血管、淋巴管等ヲ介シテ、竇壁ニ及ブ傳染機轉ニシテ、余等ノ29例中22例ハ斯クノ如キモノト思考サル。次ニ乳嘴突起炎手術ニ際シ、過ツテ竇壁ヲ損傷シ、爲メニ血栓ノ形成ヲ見ルニ至レルモノト思考セラルハモノ3例(第6例、第24例、第29例)アリ。一般ニ健康ナル竇壁ハ傳染ニ對シ頗ル抵抗アリ、單ニ之ヲ露出シ又ハ試験的穿刺等ヲ施スモ通例血栓ヲ生ズルコト無キモ、乳嘴突起鑿開手術ノ完了セザルニ先立チ不用意ニ之ヲ損傷スル時ハ、損傷部ハ往々病竈ヨリ傳染ヲ受ケ、之ヨリシテ又血栓形成ヲ見ルニ

至ル事アリ。此3例ノ如キハ又前轍ノ戒トシテ吾人ノ深ク銘記ス可キモノナラン。

斯如ク竇血栓ハ主トシテ中耳内ニ於ケル傳染機轉ガ直接ニ竇壁ニ及ビテ形成セラル、モノナルモ、ヤンゼン、ピッフル、ハイネ、クラム、パッソ一等ノ主張セルガ如ク竇周圍膿瘍ノ壓迫ニヨリ竇閉鎖ヲ來タシ、之ヨリ其上下端ニ血栓ヲ生ジタルモノト見ル可キモノモ敢テ稀ナラズ。第2例(武)、第3例(西)、第11例(小林)、第17例(松川)ハ正ニ斯クノ如キ成立機轉ヲ思ハシムル症例ナリ。即チ斯カルモノニアリテハ竇ニ余等ノ一人大野ガ、西及ビ松川ノ兩例ニ就テ記載セル如ク、孰レノ症例ニ於テモS字狀竇ノ大部ヲ覆ヘル巨大ナル竇周圍膿瘍アリテ、其部ニ於テハ竇壁壓平サレテ竇内全ク空虛トナリ、其上下兩端ニ血栓ノ存在ヲ見ルモ、其中間被壓迫部ニアリテハ、外層ニ於ケル炎性變化可成著明ナルニモ拘ハラズ、内層ハ全ク健全ニシテ、平滑、光澤ヲ有シ、組織的ニモ又其内被細胞ニ變化ヲ見ザリキ。而シテ斯カル際ノ血栓ハ化膿ノ傾向ナク從ツテ臨牀上ニ於テモ一般ニ其經過良好ナル如ク、余等ノ4例ニ於テハ惡寒戰慄其他重篤ナル全身感染ヲ思ハシムル如キ所見ヲ缺如シ、血栓器質化ノ傾向著シク、單ニ原病タル乳嘴突起炎ニ對スル手術ヲ行ヒ、竇周圍膿瘍ヲ排除シ、或ハ又血栓ノ一部ヲ除去セルノミニテ、内頸靜脈ノ結紮等ハ行ハズシテ治癒セシメ得タリ。

6. 症 候

1. 發 熱

竇血栓ノ症候トシテ發熱ハ最も重要ナルモノノ一ニシテ、時ニ之レガ唯一ノ症狀タルコトアリ。今余等ノ症例ニ就テ其熱型ヲ觀察スル

ニ、從來ノ統計ニ於ケルト同様弛張性型ノモノ最モ多ク19例(65.5%)ヲ占メ、稽留性型ノモノハ僅カ2例(6.9%)ナリ。其他微熱ヲ呈スルモノ5例(17.2%)、無熱ノモノ4例(13.8%)ヲ見タリ。而シテ微熱又ハ無熱ノモノハ一般ニ經過良好ニシテ、其多クハ既ニ器質化セル血栓ヲ有スルモノナルモ(9例中7例)、必ズシモ發熱ノ狀態ヲ以テ局所病變ノ性質ヲ定メ得ルモノニ非ズシテ、著シキ發熱ヲ見ザルモノニ於テモ第13例(若林)ノ如キハ靜脈球部骨壁ニ瘻孔アリテ中ヨリ膿汁湧出スルヲ認メ、又第7例(蛭谷)ノ如キモ橫竇心臟端ニ於テハ血栓器質化ノ傾向ヲ示セシモ、傳染機轉ハ末梢端ニ向ヒテ進行シ、終ニ兩例トモ同時ニ合併セル化膿性腦膜炎症狀ノ惡化ニヨリ不幸ノ轉歸ヲ取ルニ至レリ。尙ホ粘液性連鎖狀球菌ニヨル乳嘴突起炎ハ、通例微熱ニ終始スルコト多ク、竇血栓ヲ合併スルニ至ルモ亦往々其傾向ヲ現ハス事ノ尠カラザルハ竇ニ倉田モ注意セル所ニシテ、余等ノ經驗セル3例ニ於テモ内2例ハ無熱或ハ微熱ヲ呈シ、此兩例共ニ其血栓ハ何レモ既ニ全ク器質化セルモノナリキ。即チ粘液性連鎖狀球菌ヲ起炎菌トスル場合ハ、假令微熱乃至無熱ナルモノト雖モ、竇血栓ノ疑ヲ放棄スルニ慎重ヲ要ス。

ロ. 惡 寒 戰 慄

竇血栓ノ定型的ナルモノハ惡寒戰慄ヲ以テ急ニ發熱スルヲ特徴トスルモ、之等症狀ヲ有セザルモノモ亦屢ミナリ。余等ノ症例中、惡寒ノミ存セシモノ10例ニシテ、惡寒戰慄ヲ伴ヒシモノハ9例ノミナリ。殘餘ノ10例ハ孰レモ惡寒又ハ戰慄ヲ缺キ、然モ血栓ノ器質化セルモノニ於テハ、何レモ又之等ヲ缺如シ居タリ。

ハ. 頭 痛

竇血栓ノ際＝屢ニ患側＝偏シ。殊ニ前頭部。後頭部又ハ耳後部ニ強キ頭痛ヲ現ハス事アリ。但シ竇血栓ヲ有セザル乳嘴突起炎ニ於テモ略ニ同様ナル頭痛ヲ來タス事アルヲ以テ。之ヲ以テ一途ニ竇血栓ヲ指示スル症候トハ云ヒ難キハ勿論ナルガ。之亦重要ナル竇血栓症候ノ一タリ。然レドモ時トシテ全經過中ニ全然之ヲ缺如スルコトアリ。余等ノ症例中記載無キ1例ヲ除キ28例中偏頭痛ノ現ハレタルモノ23例(82.1%)ニシテ。之ヲ缺如セルモノハ5例ナリ。

ニ。頸 腺 腫 脹

竇血栓患者ニシテ側頸部淋巴腺ノ有痛性腫脹ヲ觸ルハハ。血栓ノ既ニ靜脈球或ハ頸靜脈ニ蔓延シ。又ハ蔓延セントシツツアル症狀トシテ注意ス可キモノナルコトハ既ニ田中教授ヨリモ注意セラレタル所ナルガ。余等ノ症例中不記載例1例ヲ除キ。28例中頸腺腫脹ヲ證明セシモノ23例アリ。而シテ臨牀上靜脈球或ハ頸靜脈ニ血栓ノ存在ヲ確認シ得タル7例中記載無キ1例ヲ除キ6例ニ於テハ本症狀ヲ缺如セルモノ皆無ナリ。依ツテ余等ハ本症候ヲ以テ竇血栓。殊ニ靜脈球或ハ頸靜脈ノ血栓ニ對スル重要ナル診斷的價值アルモノト信ズルモノナリ。

ホ。グリージンゲル症狀

乳嘴突起ノ後下縁ニ於ケル限局性ノ壓痛及ビ腫脹ハ横竇血栓ニ際シ其炎症ガ乳嘴導血管ヲ經テ乳嘴突起後方ニ波及セルモノトシテ。古クヨリグリージンゲル氏症狀トシテ横竇血栓ノ重要ナル1症狀トシテ有名ナルモ。本症狀ノ發現ヲ見ルハ一般ニ稀ニシテ。余等ノ症例ニ於テモ之ヲ證明セルハ僅カニ4例(13.8%)ニ過ギス。サレバ本症候ノ竇血栓ヲ指示スル價值ヤ大ナルモノアルモ。竇血栓ニシテ斯カル症狀ヲ示スモノ

甚ダ尠クシテ。此點本症狀ノ診斷的價值ハ甚ダ限局サルト云フ可キナリ。

ヘ。轉 移

轉移性炎症ノ發現ハ耳性竇血栓乃至一般傳染ノ特有症狀ナルモ。其發現ハ比較的稀ナリ。余等ノ症例中ニ於テモ之ガ發現ヲ見タルハ僅カ3例ノミニシテ。即チ全體ノ10.3%ニ相當ス。之ヲ諸家ノ統計ニ比較スルニ。第6表ニ示スガ如ク。其率遙カニ尠ナク。曩ニ尾崎ガ當教室ニ於テ大正11年ヨリ昭和9年ニ至ル13年間ニ於ケル竇血栓患者ニ就キ調査セン際ニ得タル20.8%ニ比スルモ。又著シク減少セルヲ知ル。之レ恐ラクハ最近ニ於ケル耳科學ノ進歩ニヨリ。竇血栓ヲシテ轉移發生以前ニ其大多數ヲ診斷シ得ルニ至リシコトモ亦其原因トシテ與ツテ大イニ力アルモノナラン。

第 6 表

報 告 者	臨 牀 例	剖 檢 例
ハ イ マ ン	34 %	42 %
ブ リ ー ゲ ル	58 %	69 %
フ ィ ー ア ント	39 %	
ギ ー ス マ ン	33.5%	57.5%
今 井	45.5%	
尾崎 (田中臨牀大11—昭9。滿13年間)	20.8%	
高 原。岡。大 野	10.3%	

而シテ此3例中。急性中耳化膿症ニ由來セルモノ1例(急性症ヨリノ竇血栓症例ノ5.0%)。慢性中耳化膿症ニ由來スルモノ2例(慢性症ヨリノ竇血栓症例ノ22.2%)ニシテ。慢性中耳化膿症ニ由來スルモノ多キヲ示シタルガ。更ニ之ヲ前回ノ10年間ニ於ケル轉移例ノ統計ト加算スルニ。61例ノ耳性竇血栓例中11例(18.0%)ニ轉

移ヲ見。内慢性中耳化膿症ニ由來セルモノ 5 例 (慢性中耳化膿症ニヨル竇血栓例ノ 26.3%)。急性中耳化膿症ニ由來セルモノ 6 例 (急性中耳化膿症ニヨル竇血栓例ノ 14.2%) ニシテ、之亦慢性症ニ於テ轉移ヲ形成シ易シトナス從來ノ説ト克ク一致ス。

次ニ其轉移部位ハ、

會厭(左側血栓)…………… 1 例……………死

右肩胛關節(右側血栓)… 1 例……………治

右肩胛關節、左膝關節、左上膊筋

肉内(右側血栓)…………… 1 例……………死

ノ如クニシテ、孰レモ大循環系ニシテ、小循環系ノモノヲ見ザリキ。

ト、血液中ノ細菌ニ就テ

血液中、殊ニ表在性靜脈ヨリ採取セル流血中ニ細菌ヲ證明スルコトハ、竇血栓 (少ナクトモ全身感染)ノ確實ナル證據タリ得ルモノナレドモ、既ニ全身傳染ノ成立セルアリ、然モ検査時期並ニ方法等ニ關シテモ充分ナル考慮ヲ拂ヒテ施行セルニモ拘ハラズ、本検査ノ陰性ナル場合又屢ミアリ。其陽性數モ報告者ニヨリテ可ナリ相違アリ。譬ヘバゲルマンハ 43 例中 23 例ノ陽性成績ヲ擧ゲ、ハイマンハ 54 例中 42 例ニ之ヲ證明セリ。余等ノ例ニ於テハ其陽性率ハ遙カニ尠ナク、検査例 13 例中細菌ヲ證明セシハ 4 例ノミニシテ、連鎖狀球菌及ビ葡萄狀球菌各 2 例ヅハナリキ。但シ之等症例ニアリテハ孰レモ好氣性培養ノミヲ施行セシヲ以テ、若シ嫌氣性培養ヲモ併セ行ハバ、其陽性率ハ尙ホ増加スルナランカ。

7. 治癒率並ニ豫後

近年腦竇血栓ニ對スル診斷並ニ療法ノ著シキ進歩ニ伴ヒ、其治癒率モ亦實ニ目覺マシキ増大

ヲ示シツヽアリ。之ヲ譬ヘバ、先年發表セル我教室滿 10 箇年間ノ統計ニ於テハ、32 例中 20 例ノ治癒、即チ 62.5%ノ治癒ヲ見タルガ、其後我國他ノ臨牀ニ於テモ倉田(山川臨牀) 73.3%、宮崎(星野臨牀) 62.1%ノ治癒率ノ報ゼラルヽアリ。更ニ今回余等ノ統計ニ於テモ、其 29 例中 22 例(75.8%)ニ全治ヲ獲タルモノニシテ、斯ク其治療成績ノ年々確固タル向上ヲ來タシツヽアルハ吾人ノ寔ニ欣快ニ堪ヘザル所ナリ。サレド余等ハ此成績ヲ以テ満足スルモノニ非ズシテ、更ニ今後ノ研究努力ニヨリテ、必ズヤ本症ノ治療成績ニ尙ホ一層ノ進歩ヲ期待シ得ルト信ズルモノナリ。

尙ホ本症ノ豫後ニ關シテ多少興味アル點ニ就キテ述ブレバ、

イ. 轉移。一般ニ轉移ヲ有スル竇血栓ハ既ニ病勢ノ進行セル事多ク、從ツテ其豫後ハ轉移ヲ有セザルモノヨリモ惡キヲ通例トス。

余等ノ轉移ヲ有シタル 3 例ハ前述ノ如ク、

會 厭……………死

肩胛關節……………治

右肩胛、左膝關節、左上膊……………死

ノ各 1 例ニシテ、内 1 例治癒(33.3%)シ、2 例ハ死亡シタリ。尙ホ前回ノ 10 箇年間ノ統計ト合シ 15 年間ニ於ケルモノヲ通覽スルニ 61 例ノ竇血栓例中 11 例(18.0%)ニ轉移ヲ見、内 4 例即チ 36.3%ノ治癒率ヲ示セリ。

次ニ余等ノ症例 29 例中ニ於テ全治シタルモノノ 95.5%ハ轉移ヲ有セズ、死亡シタルモノハ 28.5%ハ轉移ヲ有シタリ。

ロ. 他ノ頭蓋内合併症。余等ノ 29 例中ノ死亡例 7 例ニ就テ吟味スルニ、他ノ合併症ヲ伴ハザル單純ナル竇血栓ハ 21 例ニシテ、内 1 例死

亡シ。竇血栓＋軟腦膜炎ハ6例ニシテ内4例死亡シ。竇血栓＋軟腦膜炎＋腦膿瘍ハ2例ニシテ此2例共死亡セリ。即チ他ノ合併症ヲ伴ハザル單純ナル竇血栓ハ21例中1例死亡セルノミニテ其治癒率ハ95.2%ヲ示セルモ、軟腦膜炎又ハ腦膿瘍ヲ合併セルモノニアリテハ8例中6例死亡シ、其治癒率ハ25.0%ナリ。之ヲ換言セバ竇血栓ニシテ未ダ他ノ頭蓋内合併症ヲ伴ハザル早期ニ於テ之ヲ診斷シ治療セバ、其豫後ハ甚ダ良好ナリト云フヲ得ベシ。

ハ、中耳炎ノ性質トノ關係。一般ニ急性中耳化膿症後ノ竇血栓ハ、慢性症後ノモノニ比シ治癒率大ナリト稱セラレ、ハイマンハ前者ニ84%。後者ニ69%ノ治癒率ヲ示シ、前回ノ我教室ノ統計ニテハ前者ハ22例中13例(62.0%)、後者ハ10例中7例(70.0%)全治シ、ハイマンノ成績ニ相反シタリ。今回余等ノ統計ニ於テハ、急性中耳化膿症後ノモノ20例中15例(75.0%)、慢性中耳化膿症後ノモノ9例中7例(77.7%)トナリ、更ニ我教室15年間ヲ通算スルモ、前者42例中28例(66.6%)、後者19例中14例(73.6%)ノ全治トナリ、却テ慢性中耳化膿症後ノ竇血栓ニ治癒率高キヲ見タリ。

8. 過去15年間ノ統計的數字

凡テ統計的觀察ハ同一教室ニ於テ、可及長期間ノモノヲ理想トス。余等ハ以上ニ於テ、昭和7年1月ヨリ昭和11年12月ニ至ル滿5箇年間ノ耳性竇血栓ニ就キテノ統計的觀察ヲ報告シタルガ、更ニ參考ノ爲メ之ヲ前回報告ノ我教室ニ於ケル昭和6年以前ノ滿10箇年間ノ統計ト合シ、之ヲ次ニ一表トシテ掲ゲン。

(第7表參照)

第 7 表

自大正11年 滿15年間ノ耳性竇血栓ノ統計
至昭和11年

1. 症例數61例(内、他ノ合併症ヲ伴ハザルモノ46例)
2. 同期間ノ乳嚙突起炎手術數1579例ノ3.9%
3. 他ノ耳性頭蓋内合併症ト比較シテノ頻度
症例別：
竇血栓61、腦膜炎60、腦膿瘍15
4. 治癒42例(68.8%)
5. 性及年齡
性 男……37 女……24
年齡 15歳以下……12 15—50歳……31
50歳以上……18
6. 中耳炎ノ性質トノ關係
急性 42………治 28(66.6%)
慢性 19………治 14(73.6%)
(内、眞珠腫10例)
7. 罹患側
右側………32(慢7 急25)
左側………29(慢12 急17)
8. 轉移ヲ來セルモノ11例(18.0%)
内 4例治癒 (36.3%)
9. 血栓所在部位
横 竇………38
横竇、靜脈球………9
靜脈球、内頸靜脈………1
横竇、靜脈球、内頸靜脈………11
横竇、上岩様、反對側横竇………1
横竇、上岩様、靜脈球………1

第 三 章

診 斷 並ニ 療 法

前述ノ如ク我教室ニ於ケル最近5箇年間ノ本症治癒率ハ75.8%ニシテ、前回ノ統計ニ於ケル62.5%ヨリ一段ノ進歩ヲ來タシタルガ、余等ハ此成績ヲ以テ強テ偶然ノ結果ニ非ズシテ、最近5箇年間ニ於テ多少共我々ガ本症ノ早期診斷ニ、將又療法ノ改善ニ意ヲ用ヒタルノ結果ナラズヤト思惟ス。

然ラバ最近5箇年間ニ於テ、本症ノ治療ニ當リ我々ハ果シテ如何ナル點ヲ改良シタルカ。勿論我々ハ前回ノ統計的研究ニ倣ヒ治療上ノ種々ナル點ニ就テ、可及的ノ改善ニ努メタルガ、余等

ノ特ニ療法ノ改良トシテ效果アリタリト思ハレタル點ハ、主トシテ、診斷方面ニ於テクェッケンステット氏試驗法ノ應用ヲ試ミタル事ノ他ニ、療法ノ方面ニ於テ内頸靜脈結紮ノ應用範圍ヲ擴大シ來タレル事ノ2點ニシテ、以後余等ハ之等二事項ニ就キテノミ余等ノ統計的根據ヨリ聊カ考案ヲ試ミントス。

(1) クェッケンステット氏試驗法ノ價值ニ就テ。

クェッケンステット氏試驗法ノ肇メテ竇血栓ノ診斷ニ應用セラレタルハ、キンドラー(1926年)ニ依ルトコロニシテ、其後外國ニ於テハドーマン、アイヤー、トベイ及ビベルウィッキ等ニヨリ、更ニ我國ニ於テハ昭和6年田中教授ニヨリ追試サレ、之等諸氏ハ各々本法ノ竇血栓ニ對スル診斷の補助法トシテ寔ニ有意義ナルヲ述べ、其試用ヲ推奨セリ。其後我教室ニ於テ岡崎ハ昭和6年6月ヨリ昭和8年6月ニ至ル滿2年間ニ於ケル19例ノ竇血栓例ニ於テ之ヲ應用シ、其價值ニ就キテ檢討シタルガ、即チ全検査例ニ50mm以上ノ腦脊髄液壓差ヲ生ジ、其72%ニ100mm以上ノ壓差ヲ來タセルヲ見タリ。更ニ竇血栓ヲ有セザル乳嘴突起炎患者55例ニ就キテモ此應用ヲ試ミ、内49例(89.0%)ニ50mm以下ノ陰性成績ヲ得、尙ホ其際血栓無キニ拘ラズ50mm以上ノ腦脊髄液壓差ヲ生ジタル6例ニ就キテモ詳細ニ吟味シ、其成因トシテハ2例ニ於テハ竇周圍膿瘍、1例ニベツォルドノ流注膿瘍、1例ニ内頸靜脈畸形、2例ニ右橫竇ノ解剖的ニ異常ニ突隆セシニ因ルモノタリシヲ確メタルモ、之等少數ノ例外ヲ除キテハ本法ハ竇血栓ニ對スル甚ダ有力ナル診斷の補助法タルヲ確信シ、本症ノ早期診斷ノ目的ノ爲メニ本法ノ應用ヲ奨メタルガ、爾來我教室ニ於テハ多少共竇血

栓ノ疑アル際ニハ常ニ之ヲ併セ行ヒ甚ダ力強キ好成绩ヲ得居レリ。即チ第8表ノ如ク本統計ニ於ケル竇血栓29例中27例ニ之ヲ試ミ、壓差50mm以上ノ陽性成績(岡崎ニ倣ヒテ50mm以上ノ壓差ヲ陽性トス)ヲ示シタルハ25例ニシテ、陰性成績ニ終リタルハ僅ニ2例(第13, 29例)ノミナリ。然モ其2例中ノ1例タル第13例若林某ニ於テハ死後剖檢ニヨリ既ニ血栓ガ矢狀竇、直竇ニ及ビ更ニ反對側ノ橫竇ニ迄達セル事實ヲ確メ得テ、其成績ノ陰性タリシモ亦宜ナルヲ知リタルモノナリ。

第 8 表

自昭和7年至昭和11年

滿5年間ノ耳性竇血栓ニ對スル
クェッケンステット氏法ノ應用成績

血栓例 29 例		試験例 27 例	
壓 差		例 數	
50mm 以下		2	
50——100mm		9	
100——200mm		14	
200mm 以上		2	

次ニ手術時肉眼的ニ竇骨壁ノ正常ナリシニ拘ラズ竇血栓ヲ發見シ得タル6例(第5, 7, 12, 25, 26, 28例)ニ就テ吟味スルニ、發熱其他ノ症候ニ多少竇血栓ヲ疑ハシムルモノアリシ他ニ(但シ第7例ニ於テハ夫等症狀ヲ缺キシニ拘ラズ)、更ニクェッケンステット氏試驗法ガ孰レニモ陽性成績ヲ示シ、以テ愈々血栓存在ノ疑ヲ濃厚ニセシメ、遂ニ血栓ノ發見ニ至リシモノナリ。更ニ壁在性血栓ノ2例(第4, 23例)ニ於テモ、1例ハ150mm、1例ハ50mmノ壓差ヲ示シタルガ、之等2例ノ成績ノミヲ以テ壁在性血栓ニ對スル本試驗ノ價值ヲ斷ズルハ聊カ早計ニ失ス

ル懼アレバ、茲ニハ附記シテ今後ノ參考ニ資センノミ。

斯クノ如ク、クェッケンステット氏試験法ハ乳嘴突起鑿開前＝又ハ竇手術前＝本症＝對スル有力ナル診斷の暗示ヲ齎シ得ルモノニシテ、然モ其操作タルヤ至極簡單ナレバ、我々ハ本症早期診斷ノ目的ノ爲メ今後恒ニ應用シテ然ルベキ方法ナリト信ズ。

(2) 内頸靜脈結紮ノ適應＝就テ

耳性竇血栓＝際ニ其療法ノ一ツトシテ内頸靜脈ヲ結紮スル事ハ、完全ニ非ズト雖モ竇血栓＝因ル全身感染ヲ防止スル目的ニ於テ、將又竇手術＝際シテノ血栓游離ニ對スル防禦法トシテ寔ニ有意義ナル方法ナリ。サレド事實本症中ニハ此結紮ヲ行ハズシテ、單ニ血栓ノ摘出ノミニヨリテ、又或場合ニ於テハ血栓ノ摘出ヲモ行ハズシテ單ニ乳嘴突起手術ノミニヨリ治癒センメ得ル症例モ甚ダ多數ニシテ、内頸靜脈ノ結紮ヲ應用スルニ當リテハブリューゲル、キューメル、ハイマン、田中教授、其他諸學者ノ提唱サル、如ク一定ノ適應ノ下ニ施行スルガ最モ當ヲ得タルモノト考ヘラル。而シテ我教室ニ於テハ從來、

1. 既ニ轉移性炎症ノ現レタル場合。
2. 既ニ血栓ノ内頸靜脈ニ蔓延セル場合。
3. 横竇又ハ球血栓ニシテ心臟端ノ器質化ヲ見ザルモノ。
4. 竇血栓手術後尙ホ弛張熱ノ去ラザルモノ。

ニ於テノミ内頸靜脈ノ結紮ヲ行フノ方針ヲ進ミ來タリタルガ、本法ハ全ク危險無キ處置ニ非ザルノミナラズ又技術上充分ナル習熟ヲ要シ、更ニ既ニ相當ノ手術の操作ヲ加ヘタル患者ニ重ネテ本法ヲ施行セントスルハ動トモスレバ術者ヲ

シテ逡巡ノ念ヲ抱カシムルノ傾アリテ、斯カル理由ニ因ル所ナルカ、我教室ノ前回ノ統計的觀察ニ於テモ過去ノ治療ノ跡ヲ顧ミルニ、兎角本法ヲ應用スベキ時期ニ遭遇シ乍ラモ尙ホソノ施行ヲ躊躇シ、遂ニ之ガ應用ノ時機ヲ失シ死ニ至ランメタル如キ症例ノ尠カラザルヲ見タルモノニシテ、サレバ最近5箇年間ニ於ケル症例ニ於テハ夫レノ適應アリト思ハルモノニ對シテハ積極的ニ内頸靜脈結紮ヲ敢行スル意圖ニテ進ミタリ。試ニ余等ハ茲ニ大正11年ヨリ昭和11年ニ至ル滿15箇年間ノ耳性竇血栓61例ニ就キテ、之レヲ15年間ノ内前10年間ト其後ノ5箇年間トニ分チテ内頸靜脈結紮ノ效果ヲ統計的ニ比較觀察シ、内頸靜脈結紮ノ適應ニ就キ以下少シク考察ヲ廻ラサントス。

之等61例ノ竇血栓ヲ内頸靜脈結紮ト否トニ分チテ、其治癒率ヲ檢スルニ第9表ノ如ク、即チ15年間ノ前10年間ニ於テハ結紮セルモノ13例ニシテ非結紮ノ19例ヨリモ少數ナリシニ、最近5年間ニ於テハ反對ニ結紮セルモノ15例ニ

第 9 表

内頸靜脈結紮ニ關スル治癒率

報 告 者		症例 總數	結紮 +	治癒率	結紮 -	治癒率
ブリューゲル		20	10	50%	16	50%
キューメル		12	6	50%	6	83%
ハイマン		59	25	56%	34	85%
倉 田		30	3	33%	27	78%
宮 崎		29	5	60%	24	62%
田 中 臨 牀	自大正11年 至昭和6年 10年 間	32	13	61%	19	63%
	自昭和7年 至昭和11年 5年 間	29	15	80%	14	71%
	計 15 年 間	61	28	71%	33	67%

第 10 表
血栓部位ニヨル治癒率

血栓所在部位	Vj 結紮	自大正11年 至昭和6年 10ヶ年			自昭和7年 至昭和11年 5年間			計 15 年 間			治 率
横 竇	—	14	治10	死4	13	治9	死4	27	治19	死8	70%
	+	3	2	1	8	8	0	11	10	1	91%
横 竇・靜 脈 球	—	3	2	1	0	0	0	3	2	1	67%
	+	4	1	3	2	2	0	6	3	3	50%
靜脈球・内頸靜脈	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	+	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0%
横 竇・靜脈球及ビ 内 頸 靜 脈	—	2	0	2	1	1	0	3	1	2	33%
	+	6	5	1	2	1	1	8	6	2	75%
横 竇・上岩様及ビ 反 對 側 横 竇	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	+	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0%
横 竇・上岩様及ビ 靜 脈 球	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	+	0	0	0	1	1	0	1	1	0	100%
總 計	—	19	12	7	14	10	4	33	22	11	67%
	+	13	8	5	15	12	3	28	20	8	71%

シテ、非結紮例ハ 14 例ヲ示シ、前者ノ僅ニ多ク、然カモ其治癒率ハ結紮ト結紮ヲ行ハザル側トノ何レニモ上昇ヲ見タルガ、殊ニ結紮側ニ於テ 61%ヨリ 80%ニ著シク上昇ヲ來タシ居ルガ注意ヲ惹キタリ。

然ラバ從來ヨリモ最近 5 箇年間ニ於テ結紮例ノ増加セルハ如何ナル部位ノ血栓ナルヤヲ疑ヒ、之等 61 例ニ就キテ血栓部位別ニ分類觀察シタルニ、第 10 表ノ如ク最近 5 年間ノ症例ニ於テ横竇血栓例其物ノ増加セル事實ヲ認ムルノ他ニ、然モ夫等横竇血栓例ニ於テ從來ヨリモ遙ニ多ク内頸靜脈ノ結紮ヲ行ヘルヲ見タリ、即チ既往 10 箇年間ニ於テハ横竇血栓 17 例中僅カ 3 例結紮セルノミナルガ、最近 5 年間ニ於テハ 21 例中 8 例、即チ半數近クニ結紮ヲ行ヒ、然モ 8 例全

部治癒シ居リ、結紮セル横竇血栓ヲ 15 年間ニ亘リ通覽スルニ 90.9%ノ治癒率ヲ得居レリ。然レ共茲ニ一方翻ツテ、結紮ヲ行ハザリシ側ヲ見ルモ、15 年間ニ 27 例ノ横竇血栓例中 19 例、即チ 70.3%ニ治癒セルハ亦考慮ヲ要スル點ニシテ、或特定ノ症例ニ於テハ結紮ヲ行フノ必要無キヲ確カニ此事實ヨリ教ヘラル。

然ラバ竇血栓ニシテ内頸靜脈ノ結紮ヲ行フ必要無キハ如何ナル場合ナルカト思ヒ、最近 5 箇年間ノ 29 例ニ就テ、之ヲ手術様式ニヨリ分類吟味シタルニ第 11 表ノ如シ、即チ乳嘴突起炎ノ手術ノ他ニハ内頸靜脈ノ結紮モ竇手術モ行ハズシテ自然ニ治癒セシメタルモノガ 29 例中 7 例(第 2, 9, 10, 11, 15, 20, 27 例)アリ、之等ハ内 1 例(第 17 例)ニ於テノミ弛張熱ヲ有シタルガ、

第 11 表

手術様式別ニヨル治癒率 (自昭和7年
至昭和11年)

手術様式	症例 總數	治 癒			死 亡		
		計	急性	慢性	計	急性	慢性
竇手術(—) Vj.L. (—)	7	7	5	2	0	0	0
竇手術(+)	7	3	2	1	4	3	1
竇手術(+) Vj.L. (+)	13	10	7	3	3	2	1
Grunert 法	1	1	1	0	0	0	0
Vj.L. (+)	1	1	1	0	0	0	0
合 計	29	22	16	6	7	5	2

他ハ微熱又ハ無熱ニシテ、孰レモ充分器質化セシモノナリ。之等ノ經驗ヨリシテ今後斯カル症例ニハ乳嘴突起手術ノミデ充分ナルヲ知り得。次ニ竇手術ノミ行ヒ最後迄内頸靜脈ノ結紮ヲ行ハザリシモノ7例アリ。内器質化傾向ノ確實ナリシ3例(第3, 17, 18例)ノミ治癒シ4例死亡セリ。即チ其死亡例中3例(第4, 7, 25例)ハ腦膜炎+腦膿瘍。又ハ腦膿瘍ヲ合併セル爲メ。1例(第21例)ハ弛張熱アル＝拘ラズ竇手術ニ止メ、遂ニ轉移ヲ來タシ死亡シタルモノナリ。次ニ竇手術ト結紮ト共ニ行ヒシモノ29例中13例アリ。内3例(第5, 12, 13例)ハ合併セル腦膜炎ノ爲メ死亡セリ。尙ホ此成績ガ竇手術ノミニ止メタルモノヨリモ遙ニ良好ナルハ余等ノ興味ヲ惹キタル點ナリ。

此他、内頸靜脈ノ結紮ノミ行ヒタルモノ、又グルーネルト氏手術ヲ施シタルモノ各1例アリテ孰レモ治癒シ居レリ。

以上ノ統計的事實ヲ種々熟考吟味スルニ、要スルニ我教室ニ於テハ、最近5年間ニ從來ヨリモ多數、特ニ横竇血栓例ニ於テ、血栓摘出ノ他ニ内頸靜脈結紮ヲモ併セ行ヒ、然モ確カニ良結果

ヲ齎シ得タルヲ知り得。而シテ此横竇血栓例タルヤ。耳性竇血栓例中吾人ノ最モ屢々遭遇スルモノタルハ第10表ニ示ス如クナルガ。本症例ニシテ既ニ轉移ヲ來タセルカ。又ハ血栓ノ器質化傾向ヲ有セズシテ之ヨリ全身傳染ヲ來タセル事確實ナル際ニ於テハ、之ニ内頸靜脈結紮ノ適應アルハ言フ俟タザル所ナルモ。他方斯カル病勢ノ進行シタル所見ヲ缺ケルモノモ亦多ク。後者ノ場合ニ於テハ乳嘴突起手術時ノ所見ノミヨリ果シテ其血栓ガ横竇ノミニ限局シ靜脈球又ハ内頸靜脈方面ニ蔓延シ居ラザルヤ。更ニ又血栓ノ既ニ器質化セルヤ如何ニ就キテ明瞭ニ之ヲ識ルノ困難ナル事屢々ニシテ、從ツテ之ヲ如何ニ處置スル乎。即チ全ク拱手以テ經過ノ觀察ニ止メルヤ。又ハ單ニ血栓ノ摘出ノミニ止メルヤ。將又進ンデ内頸靜脈ノ結紮ヲモ併セ行フヤニ關シテハ判斷ニ迷フ事尠カラズ。斯カル場合從來ハ概シテ内頸靜脈ノ結紮ヲ行ハズシテ其後ノ經過ヲ觀察シ、確カニ本法施行ノ必要ニ迫ラレタル時期ニ至リテ初メテ之ヲ行フノ傾アリタルモ。既ニ此期ニ及ビテハ假令本法ヲ行フモ其效果ヲ來タシ得ザル事ノ多ク、サレバ斯カル時期ニ至ラザルニ先立テテ本法ヲ行フノ緊要ニシテ、余等ハ最近5箇年間ニ於テ之等横竇血栓ノ多數症例ニ本法ヲ施行シタル際ノ經驗ニ基ヅキ、特ニ斯クノ如キ症例ニ於ケル本法應用ノ適應ヲ次ノ如ク定メ進ムヲ妥當ナラズヤト考フ。

1. 横竇ニ於ケル血栓ガ既ニ器質化セルカ、又ハ器質化傾向ノ確實ナリト認メラレ、然モ微熱又ハ無熱ノ場合ハ、乳嘴突起手術ノ他ニハ竇手術及ビ内頸靜脈結紮ヲ行ハズシテ其後ノ經過ヲ觀察ス。

2. 横竇血栓ノ未ダ充分器質化セザル場合ニ

於テモ。微熱ニシテ一般症狀ノ良好ナル際ハ。先ヅ單ニ竇手術ニ止メ。其後ノ經過ヲ觀察シ。術後弛張熱其他全身傳染ノ徵候ヲ來タセル際ニ於テノミ速ニ内頸靜脈ノ結紮ヲ行フ。

3. 横竇ニ血栓ヲ認メ。然モ其血栓ノ充分器質化シタリトノ自信ナク。更ニ腦膜炎。腦膿瘍ヲ思ハシムル所見無キニ拘ハラズ弛張型又ハ間歇型ノ發熱アリ且ツ其熱源ノ認ム可キモノ無キ場合ハ。先ヅ内頸靜脈ノ結紮ヲ行ヒ。然ル後直チニ血栓摘出ヲ圖ル。

要之。余等ハ茲ニ我教室過去 15 箇年間ノ耳性竇血栓 61 例ニ就テ。其治療ノ跡ヲ統計的ニ回顧シ。主トシテ診斷方面ニ於テハクエッケンステット氏試驗法ノ應用ニヨリ。療法方面ニ於テハ内頸靜脈結紮ノ應用例ノ増加ニヨリ。最近 5 箇年間ニ於テ從來ヨリモ一段ト治療成績ノ向上ヲ齎シ得タル事實ヲ報告スルト共ニ。更ニ今後我々ノ執ラントスル治療方針ニ就キテモ鄙見ヲ述べ。以テ將來ノ參考ニ資セントセルモノナリ。

(擧筆スルニ當リ。御校閣ノ勞ヲ賜ハリシ。恩師田中教授ニ深謝ノ意ヲ表ス。)

主 要 文 献

1) 田中文男：我教室ニ於ケル既往10箇年ノ耳性頭蓋内合併症ノ統計。大日耳鼻。第38卷。第6號。2) 田中文男。桑原良一。西村伊勢松：我教室ニ於ケル耳性腦靜脈竇血栓ノ統計的研究。大日耳鼻。第38卷。第6號。3) 今井龍雄：我ガ臨牀ニ於ケル耳性腦竇血栓及ビ膿毒敗血症ノ統計。大日耳鼻。第38卷。第6號。4) 今井龍雄。洲崎憲治：無熱ニ經過セル耳性腦靜脈炎ノ2例並ニ其原因ニ關スル考察。大日耳鼻。第39卷。第7號。5) 中村登。中村文雄：粘液性連鎖狀球菌ニ因ル中耳炎(Mucosus Otitis)ノ統計的研究。京都府大誌。第6卷。第5號。6) 岡崎衛生：耳性横竇血栓診斷法トシテノクエッケンステット氏試驗ノ價值ニ就テ。耳鼻。第7卷。第3號。7) 尾崎嚴衛：耳性腦靜脈竇血栓ノ轉移ニ就テ。東京醫誌。第2954號。8) 田中文男：耳性靜脈竇血栓及ビ耳性全身傳染。耳鼻全書。第3卷ノ3。8) 倉田包雄。藤田義英：耳性腦竇血栓33症例ニ就テ。大日耳鼻。第43卷。第3號。10) 宮崎敏男：我教室ニ於ケル耳性頭蓋内合併症ノ統計的觀察。耳鼻臨牀。第32卷。第11號。11) 大野勤次

郎：壓迫性横竇血栓ノ2例。耳鼻臨牀。第32卷。第5號。12) Alexander: Zur Chirurgie die Vena jugularis. Zeitschr. f. Ohk. Bd. 45. 13) Blau: Kasuistischer Beitrag über fieberlosen Verlauf der otogenen Sinusthrombosen. Arch. f. Ohk. Bd. 74. 14) Haymann: Die otogene Sinusthrombose und die otogene allgemeininfektion. Handbuch d. Hals-Nasen-Ohrenheilkunde von Denker u. Kahler. Bd. 8. 15) Jung: Berichte über die von 1903 bis 1929 an der Universitäts. klinik beobachteten 175 Fälle von Sinusphlebitis. Zeitschr. f. H. N. u. Ohk. Bd. 23. 16) Kindler: Ein neues Zeichen otogenen Thrombosen des Sinus transv. und sigmoideus mit Hilfe der Liquordruckprüfung festzustellen. Münch. Med. Wochenschr. 1926. 17) Körner-Grünberg: Die otitisch. Erkrankungen des Hirns, der Hirnhäute u. der Blutleiter. 5. Auflage, 1925. 18) Mygind: Treatment of otogenic sepsis and sinus thrombosis. Acta oto-laryngologica. Vol. 16.

(原稿到着ニ昭和 13・9・12)